

2. 侵襲性肺炎球菌感染症

Invasive pneumococcal disease

埼玉医科大学病院感染症科・感染制御科

樽本 憲人・前崎 繁文

Norihito Tatumoto
(講師)Shigefumi Maesaki
(教授)

Summary

肺炎球菌は、濃厚接触時に飛沫感染などにより感染し、小児と高齢者を中心に感染症を発症するが、特に、本来無菌であるべき部位から検出された場合、侵襲性肺炎球菌感染症 (invasive pneumococcal disease : IPD) と呼び、感染症法において5類感染症に指定されている。病原因子のひとつに莢膜の存在が挙げられるが、これをターゲットにした肺炎球菌ワクチンが開発され、現在わが国では23価肺炎球菌莢膜ポリサッカライドワクチンおよび沈降13価肺炎球菌結合型ワクチンが使用可能である。感染対策として、これらワクチンの接種率を向上させることで、大きな効果が期待されるが、その他、咳エチケットを含めた標準予防策の徹底、およびアウトブレイクに対する監視が必要である。さらに、感染症発症者の周囲の患者が易感染状態である場合には、カーテン隔離や、ベッド間隔を確保することが望ましい。

Key Words

肺炎球菌は、グラム陽性の双球菌であり、重要な病原微生物のひとつである。呼気中の飛沫によって感染し、免疫低下や粘膜バリアの破綻を契機に呼吸器、耳鼻科系の感染症を引き起こすが、特に、血液や髄液などのような本来無菌であるべき部位から肺炎球菌が検出された場合、侵襲性肺炎球菌感染症 (invasive pneumococcal disease : IPD) と呼ばれ、2013年4月より、5類感染症として、感染症法に指定されている。IPDを含めた肺炎球菌感染症は、主に市中感染症として発症するが、濃厚接触などにより院内感染を起こすことがある¹⁾。このため、感染対策として、標準予防策の徹底やアウトブレ

侵襲性肺炎球菌感染症、莢膜、23価肺炎球菌莢膜ポリサッカライドワクチン、沈降7価肺炎球菌結合型ワクチン、沈降13価肺炎球菌結合型ワクチン

イクの監視に加え、肺炎球菌ワクチンによる予防も有効な対策となりうる。本稿では、IPDを含めた肺炎球菌感染症に対し、肺炎球菌ワクチンを含めた感染対策について解説する。

肺炎球菌感染症の疫学

肺炎球菌は、小児の3割、成人の1割程度に保菌として認められる。しかし、バリアの破綻や免疫が低下した場合、肺炎、中耳炎、副鼻腔炎などの原因菌となり、IPDとして発症した場合には重篤となる場合もある。特に乳幼児における髄膜炎では、10%に精神発達遅滞、四肢麻痺や難聴などの後遺症

◆メモランダム◆

肺炎球菌の治療には、ペニシリン系薬が有効とされてきた。しかし、一部の肺炎球菌はペニシリン系薬に耐性を示すが、耐性肺炎球菌 (PRSP) および中等度耐性肺炎球菌 (PISP) と称する。2008年に改訂された米国臨床検査標準協会 (CLSI) の基準では、経口治療かどうか、髄膜炎かどうかで耐性の基準が異なる。なお、非経口治療、非髄膜炎症例のPRSPとPISPの肺炎球菌に占める割合は、厚生労働省院内感染対策サーベイランス (JANIS) の2013年の年報において、2.6%と報告されている。

Surgery Frontier 22(3) : 13-16, 2015